

歴史探訪

阪堺鉄道から南海鉄道

左図は、『最新案内鉄道旅行図』一九三三年（国際日本文化研究センター蔵）の大阪周辺（南海鉄道）の鉄道路線図を示したものです。私鉄や南海鉄道の一九〇七年の電化後にできた駅などが記入されていませんので、一九一三年の鉄道網ではありません。注目すべきは駅間の長さです。南海鉄道は、難波、天下茶屋、住吉、大和川、堺と続きますが、蒸気機関車運転で駅間は7kmが最も効率が良いといわれる中、これでも3kmと駅間は短いほうでした。城東線、関西線で駅が少なく、東海道線の駅の数は、大阪梅田から三宮まで、神崎（尼崎）、西宮、住吉しかありませんでした。平均8kmという駅間の長さが伺えます。

しかし、大阪という大都市を抱え、こうした鉄道は富裕層の別宅居住のための交通網として当初は使われました。阪急（箕面有馬電軌）が本格的に登場する一九一〇年代の郊外の誕生以前となりますが、それが南海では天下茶屋、東海道線では神戸の住吉が、最初にそうした場として、明治中期に別宅地が成立します。また別機会で記したいと思います。（水内俊雄）



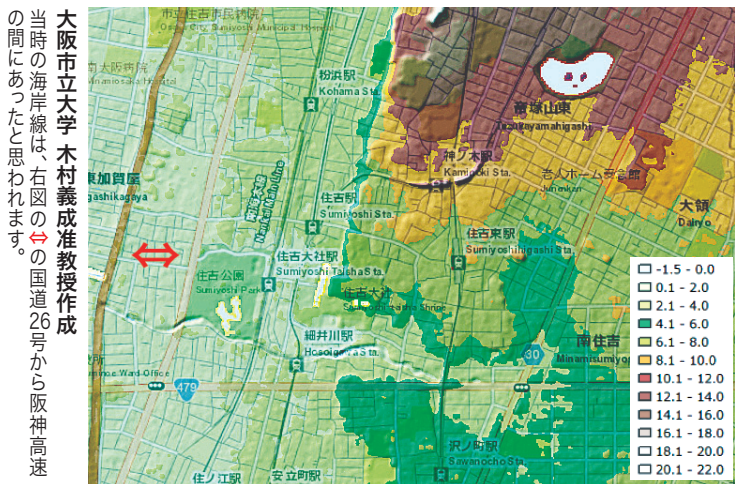
浅沢社（浅澤神社）のカキツバタ
住吉大社 提供

住吉浦の地形的特質 植生をあらわすカキツバタ

現在の住吉公園の原型となるのが、古代の住吉津（浦）と住吉神社であります。有名な国宝俵屋宗達筆「源氏物語関屋濡標図屏風」の濡標図（3面上図）に描かれた住吉は、沖に明石の上の船があり（この船の航路は、謡曲「高砂」そのものです）、陸地は白砂青松で、まるで海水浴場のようになっています。

淀川・大和川に大阪湾岸流が激しくぶつかっている難波津より、操船が容易だったことから、人や荷物は沖の船から小舟で移動させていたと思われます。『浪花上古図説』（3面右図）などもそれを示しています。天満砂堆のわずかなくぼみが住吉にあり、これが港になっていますが、住吉の場合は、このくぼみの奥に細江川や手洗川といった細流が作った沢と入江があり、さらに安全な二重構造となっていたようです。

さて、現在、住吉区の花であるカキツバタは、アヤメ科アヤメ属の植物で、日本全体に分布し、「いずれ菖蒲（アヤメ）か 杜若（カキツバタ）」の言葉でも分かるように、野生種でも美しい花の一つになります。大型できれいな草花の少ない日本にあって、ユリと



大阪市立大学 木村義成准教授作成
当時の海岸線は、右図の⇄の国道26号から阪神高速の間にあったと思われます。

並んで昔より注目され、愛知の「八橋」や京都の「大田ノ沢」など名所も多く、絵画、工芸、和歌の素材となり続けています。カキツバタは、日本産のアヤメ属植物の中でも深水を好む性質があり、次いでノハナシヨウブ・ヒオウギアヤメが水際に生育するくらいで、他のアヤメ属は皆陸地に生育しています。この水中に生育できることから、住吉津にあった沢のように、海浜ではあるが細江川の河口に開けた場所に群生地ができたのです。海水の影響が混じりだす汽水域にはカキツバタはなく、葎（アシ）が主な植生となり、手洗川横の七道村では、江戸期もずっと葎年貢が課されています。

池（よさみいけ）・今池・長居の沢にもたくさん咲いていたと思われます。浅沢社のカキツバタについては、『万葉集第七巻』に「住吉の浅沢小野の杜若（カキツバタ） 衣に摺りつけて着む日知らずも」とありますし、下つて『千載和歌集』には「五月雨に浅沢沼の花かつみ かつ見るままに隠れ行くかな」（藤原顕仲）とあります。カキツバタは多年性の草本で株分けもしやすく、その清々しい花の色は水辺の風趣を盛り上げてくれます。ちなみによく似ていても、アヤメは水中には生育できないので、区分の方法のひとつであります。（寺田孝重）

標高図と当時の住吉津と海岸線の想定

上図を見ると、細江川の陸地側への切り込みが大変印象的です。それより北側は上町台地の末端にあたり、茶色で示されているように標高一〇メートル以上となっていますが、細江川の溪で、五メートル以上地形が切り込まれています。うすい緑色の標高まで、古代期には海水が来ていたと思われます。当時の住吉津の海岸線が想定できます。細江川より南に我孫子台地が広がることになり、その台地を大和川が人工的に開削され、難工事となりました。この細江川の溪筋の低地は、カキツバタの植生には絶好の土地条件であったように思われます。港湾として好適であったかに関しては、大阪湾流や細江川による土砂の堆積は見られたかもしれません。（水内俊雄）

屏風図の陸路と海路／水路の邂逅

『源氏物語』を絵画化した左の屏風図は、当時の地形を知る上でも、重要な住吉の地理を表しています。

たまたま参詣が重なり、ニアミスで遇えなかった擦れ違いに、和歌をやり取りして意志の疎通をはかる際、詠んだ歌が「身を尽した

当時の海岸線の状況とその描写について

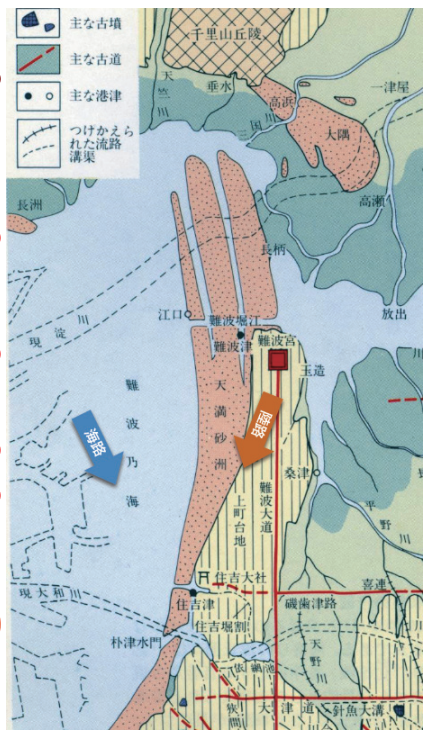
恋」と海の標識「濡標」との掛詞で交わされる、という場面であり、左上図のように海路と陸路の邂逅（かいこう）の地が住吉であったといえるかもしれません。

【光源氏】※牛車、大勢
平安京↓淀川↓（渡辺）陸路↓住吉社頭
須磨↓大阪湾↓住吉浦↓住吉社頭
（小出英詞）

当時の住吉津の海岸線がいわゆる白砂青松の今でいう海水浴に適した砂岸であったのか、松は植わっていたのか。左図はこの地の当時の地形復元で代表的に使われる日下雅義氏の描かれた想定図で、天満砂州と記されています。下図の平安時代までであれば、想定絵図であるとしても、上町台地の崖より少々距離をもって海岸線が描かれ、一部に松が描かれています。平安時代も前期の歌ならば、百人一首の「すみのえの岸による波よるさへや」のように、浪が寄せては返る海岸は、浜ではなく岸なので、上町台地の古代の崖にふさわしい表現かもしれません。新古今集など、鎌倉時代に近づくと住吉の「浜」の歌ばかりになっていきます。（小出英詞、水内俊雄）



国宝 俵屋宗達筆「源氏物語関屋濡標図屏風」のうち濡標図（静嘉堂文庫美術館所蔵）
静嘉堂文庫美術館イメージアーカイフ / DNPpartcom



出典「古代景観の復元」日下雅義、中央公論社、1991年
中古の大阪付近の地形、海岸などの復元図です。住吉津の重要性が見て取れます。



住吉公園の『源氏物語の碑』

中世の住吉は王朝貴族の住吉詣が多く平安のみやびにつつまれていたこの碑はかかる王朝をしのび、歴史を振り返り郷土を愛するためのよすがである。昭和五十七年四月吉日
財団法人住吉名勝保存会 建之

源氏物語の碑

（公園北東、南海本線「住吉大社駅」西口前）
説明銘板
真住吉し 住吉の国は 万葉の昔から数多くの和歌や文学作品にその名をとどめている
源氏物語濡標に描かれた明石上の悲しい恋もこの地が舞台である 船で訪れた明石上はなつかしい光源氏の華やかな住吉詣に出合ったが、再会することなくそのまま帰る
中世の住吉は王朝貴族の住吉詣が多く平安のみやびにつつまれていたこの碑はかかる王朝をしのび、歴史を振り返り郷土を愛するためのよすがである
昭和五十七年四月吉日
財団法人住吉名勝保存会 建之



続後撰和歌集六八四（従三位行能）
浅香浦 住吉の浅香の浦のみをつくし
さてのみ下に朽やてはてなん
壬（集二四四五）（家隆）
出見浜 秋の夜は月のかりも住よしの
出見のはまの有あけのそら
詞花和歌集三二（相模）
細江 住吉の細江にさせるみをつくし
深きにまけぬ人はあらしな
万葉三二八三（読人不知）
榎津 住吉の榎津に立ちて見渡せば
むこのとまりゆ出づるふな人
新古今和歌集三五（後徳大寺左大臣）
那古海 那古の海の霞のまよりなみわれば
入日をあらふ沖津しらなみ
新後撰和歌集五九八（後徳大寺左大臣）
鋪津浦 住吉の松のいはねをまくらにて
敷津の浦の月をみるかな
御室五十首七二（公継）
岸野 夕されば錦と見ゆる住吉の
岸のいはきをあらふしらなみ
古今和歌集八九四（読人不知）
三津浜 おしるや難波の三津に焼塩の
からくも我はおひにけるかな
続後撰和歌集〇三五（従三位行能）
三津浦 大伴のみつ松原まつ事の
ありとはなしに老そかなしき

歴史探訪